

清水一行

長編企業小説
文庫書下ろし

会社
泥棒



光文社文庫

文庫書下ろし／長編企業小説

かい しや とう ぼう
会 社 泥 棒

し みず いつ こう
著 者 清 水 一 行

2003年7月20日 初版1刷発行

発行者 八 木 沢 一 寿
印 刷 萩 原 印 刷
製 本 ナ シ ョ ナ ル 製 本

発行所 株式会社 光 文 社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8114 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Ikkō Shimizu 2003

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-73518-5 Printed in Japan

図本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

光文社文庫

文庫書下ろし／長編企業小説

会社泥棒

清水一行



光 文 社

この作品は光文社文庫のために書下ろされました。

目次

第一章	昇進	5
第二章	衝撃	41
第三章	もたらされた期待	77
第四章	それぞれの事情	111
第五章	不安の種	151
第六章	難産の新体制	193
第七章	蛇行運転	232
第八章	戦いの奥義	277
解説	郷原 宏 ごう はら ひろし	334

第一章 昇進

1

ポリウムを開いているせいで、腹の底に響くようなリズムに乗っていると、全身の血が沸き立ってくる感じだった。

数カ月前に入会したばかりのスポーツジムでエアロビクスに参加するのは三回目。ふだん体を動かすことになれていないせいで、日下^{くさか}康士^{やすし}は初めのうち、うまくテンポに乗れなかったが、やがて^{にじ}滲み出てきた汗と一緒に、体の中からもやもやが吹き飛んでいった。

「両手を上げて、ソレー！」

呼吸をはかったインストラクターの号令に、フロアーの中央で踊る十四、五人が声を張り上げ、頭の上で腕を激しく振って、足をはね上げる。連続した激しい動きに、日下はさすがに息が切れてきた。

周囲で踊りに浸りこんでいるメンバーには、日下よりもっと年配の会員たちが多かったが、苦しそうな顔も見せず、誰もが愉たのしそうに踊っていた。

やがてリズムが穏やかになり、息が落ち着いてきた。

身体中の皮膚が、汗でぐっしより濡れている。終わったら頭からシャワーを浴びて、ビールを…………と日下は考えていた。

息が整ってくると、ふっと虚しさにとらわれた。休日の土曜日だというのに、どうして自分は一人で、エアロビクスなど踊っていなければならないのか。日下にとって今日は意味のある日だったから、本当なら家族から祝福されていてしかるべきだった。

二日前の四月一日付けで、日下は経営企画室企画課長の辞令をもらっていた。四十一歳で港区田町たまちに本社を構えた、資本金十億円の住沢工業すみさわの企画課長なら、一応は出世ラインに乗ったと評価されるところだった。

住沢工業の頭脳ともいふべき企画室は、普通の会社の秘書課機能も担当する、特殊なものだった。ただ今年は厄年やぐどしだからと、大分の郷里にいる父親の保夫やすおに注意され、多少は身を慎まなければならぬなど、覚悟はしていたが、そんな懸念を跡形もなく吹き飛ばす朗報だった。

だが喜びを分かち合おうにも、妻の和江かずえと四歳になる一人娘のこずえは、東神奈川の横浜港を見下ろす実家へ帰ったまま。

「あらそう。よかったじゃない」

電話で待望の課長昇進を伝えたが、いつものことで和江からは、素っ気ない応えが返ってきただけだった。

東神奈川にある和江の実家は、県内に五店舗を持つ中堅スーパーを経営していた。そのせいでなにかといえはお店の手伝い……を理由に和江は里帰りをする。店の手伝い名目だったから、一度出かけて行けば時には半月、一カ月近くも戻ってこなかった。

日下にも実家の居心地のよさはわかるが、それでは夫婦とは言えなかった。

結婚生活が嫌になったのか、さもないければほかに、なにか特別な事情でもあったのかと勘ぐりたくもなるが、どうやらそうではなく、和江は実家で病気の父の世話を焼いたり、港に近かったから、空気が長女のアトピーに、いいとかが理由だった。

裕福な老舗スーパー・オーナーの一人娘として、甘やかされて育っていたから、エレベーターもない公団住宅の四階で、子育てに追われるだけの生活は苦痛なのかもしれない。だが夫が待望の昇進を果たしたというときぐらい、喜んで駆け戻ってきたらどうかと、体を動かしていても日下の鬱積うつせきした思いが晴れない。

そのときインストラクターの掛け声とともに、エアロビクスのリズムが急に速くなり、和江への不満を抱えこんでいたせい、日下は不意なテンポの変化についていけず、手足の動きがバラバラになった。

バランスを崩した日下は、たたらを踏んで大きくよろめき、左隣りの女性に勢いよくぶつか

つていった。

「キヤー！」

その拍子に、女性は日下に押し倒されるように床に崩れた。

「あ、すみません。大丈夫ですか」

慌てて、一七三センチの長身を起こした日下は、もつれて倒れている女性を引き起こそうと手を伸ばした。

「痛い！」

日下の手を拒み、倒れた女性は左足の向う^{むき}臍^{ずね}を両手で押さえ、細面^{ほそおもて}の顔を苦痛に歪めた。

「動かないで」

あわててラジカセの音楽を消したインストラクターが駆け寄ってきた。倒れた女性の周りを、一緒に踊っていた会員たちが、心配そうな顔で囲んでいる。

「すぐ冷やさなくちゃだめ。動かないでそのままにいてください」

女のインストラクターがスタジオを走り出ていき、やがてバケツに氷水を入れて戻ってきた。その間に女性の左足は早くも打撲で青黒く腫れ上がってきた。

肩を貸してロビーへ移動させる。

椅子に座らせてバケツに左足を漬けさせた。痛みが激しいのか、色白な顔でレオタードの上に、ショートパンツをはいた女性は、泣きそうに顔を歪めていた。

「すぐ病院へお連れします」

日下が両手を差しのべて言った。

「急性の炎症を止めるため、しばらく冷やしていた方がいいでしょう。その間に病院の手配をしておきますから」

インストラクターが電話をかけに、事務所へ走っていった。

「わたしの責任です。何とお詫びしたらいいのか……」

日下は骨張った色黒の顔をしかめ、唇を真っ直ぐ結んで頭を下げた。女性は力なくうなずいたが、ひそめた眉は元に戻らなかった。

だが冷やしているうちに、歪んでいた女性の顔が、やや落ち着きを取り戻してきた。

やがて普段の表情に戻った女性は、整った細面とは対照的な長い睫毛に、切れ長の目、鼻筋が通り小さな唇で、まだ放心しているようだったが、美人……と日下が咄嗟につぶやくくらい、整った顔だちだった。

年齢は三十歳くらいか、黄色いレオタードに包んだ胸許のふくらみ。一六五センチほどで、手足が長くプロポーションが良かった。

腹部を中心に、このところ目立って脂肪が厚くなってきた和江と、思わず比較したが、馬鹿なことを考えている場合ではないと、日下は重ねて女性に詫びた。

「車を取ってきます。インストラクターのオーケーが出たら、病院へ行きましょう」

やっと眉間の皺が消えた女性が、日下の言葉に小さくうなずいた。日下は車を駐車場からスポーツクラブの玄関に回した。ロビーへ戻ると、応援の男性インストラクターに肩を支えられ、白いトレーナーをおった女性が、足をひきずって歩いてくるところだった。

「近くにジムと提携している整形外科があります。電話で予約してありますからご一緒しましょう」

インストラクターがきびきびした口調で言った。

日下はうなずいて女性のもう一方の腕に肩を入れ、インストラクターと二人で抱えて車に乗せる。体を動かしたせいで痛みが戻ってきたのか、女性は顔を歪めていた。

インストラクターに案内され、女性を整形外科医院に運び込み、レントゲンを撮っている間、日下は待合室で落ち着かなかった。骨が折れていたかどうか。主婦なのか、それとも〇しなのか。家に小さな子供がいたら、不自由な足で家事をするのも、容易ではないはずだった。仕事を持っていれば長く休まなければならぬ。

治療費を負担するのは当然だったが、治療費だけですむとは思えない。その場合どう償えばいいのか。

四十歳を過ぎて、エアロビクスなどやるのではなかった。いつもはジムでマシントレーニングと水泳だけなのに、今日は無性に体を動かしたくなり、三度目でしかないエアロビに参加したのが失敗だった。

女性は診察室に入ったままだった。診察の結果はどうなったか、日下はなお不安と後悔に苛まれ、早く知りたかった。三、四十分ほどして診察室のドアが開き、足首に包帯を巻いた女性が、足を引きずりながら、医師の手を借りて出てきた。

「どんな状態でしょうか」

日下は椅子から立ち上がって聞いた。

「男性の骨格は硬いですからね、それに背も高いし。当たり方によつてはまずいことになるかなと思います」が、幸い患者さんの骨には異常がありません。すぐ冷やしたのが効果的で、一週間もすれば痛みが取れて、普通に歩けるようになるでしょう」

「良かった」

日下は胸をなでおろし、ほっとして肩の力を抜いた。

治療費はすべて自分が負担するからと、小さな窓口の白衣の事務員に告げ、会社と自宅、携帯電話の電話番号をメモして、事務員に手渡した。それを眺めていた女性が軽く頭を下げた。

「面倒をおかけします」

「いやいやすべて私の責任ですから」

日下は改めて女性に名刺を渡し、事務員と同じメモも加えた。

「ご丁寧にどうも」

女性は浦野佑子ですと名乗った。車に乗るまでの痛々しい包帯姿が、日下の責任を迫ってい

るようで苦しかった。

知らない男にいきなりぶつかられ、フローリングに押し倒され、怪我をさせられたのだから、簡単には許せないに違いなかった。

日下はスポーツクラブへ戻り、ロッカーから荷物を取ってきた佑子を、自宅へ送らせてくれと申し出たが、自分も車で来ているからと首を振られた。足を痛めていて運転ができるのかと心配したが、その点はオートマ車だったから、右足だけで操作はできるということだった。

それでも日下は、佑子からバッグを奪うように取り、駐車場まで付き添った。白い小型車が佑子の車だった。

「どんなことでも申しつけてください。わたしでできることはさせていただきます」

日下は改めて謝罪し、佑子が不自由な動作で車に乗り込み、アクセルを踏んで走り去るのを見送った。

まずいことをしてしまった――

ロッカーから自分の荷物を取り出し、汗で汚れた下着もそのまま、車で自宅へ向かいながら日下はしきりに悔やんだ。

妻にたいする、一瞬の苛立ちを抑えようとしたばかりに、他人をひどく傷つけてしまった。家に和江がいてくれさえしたら、こんなことにはならなかったのにと、八つ当たり気味な怒り

が募ってくる。悪かったのはあくまでも自分で、妻子のせいではないとわかっているが、持っていき場のない腹立ちは、留守の多い妻の和江に向かってしまう。

体から酸っぱい臭いがした。汗をたっぷりかいたのに、下着を替える余裕もなく病院へ走り、とりあえず納まりがついて、ホツとしながらジムへ戻っても、もうシャワーをする気分になれなかった。

しかし汗をかいだ肌は、べたついて気持ちが悪かった。

家に帰ったら真つ先に、頭からシャワーを浴び、ビールで喉を潤そう。その後、夕飯は近くのラーメン屋で、チャーハンでも食べればいい。

ジムからは十分ほどで春日部^{かすかべ}団地に着いた。日下は埼玉県春日部市にある明和大学経済学部を卒業し、住沢工業へ就職してからも、春日部の、学生時代からのアパートに居つづけ、和江と結婚してやっと、だが結局同じ春日部市内の、三Kの公団住宅へ転居した。

たまたま春日部の大学へ通い、卒業したというだけで、山口県生まれの日下にとって、埼玉県に住みつづける理由や根拠はなにもなかった。しかし住んでみると都会でも田舎でもない、伸びていく地方の都市として、日に日に広がっていく活力が緑の野菜畑の色彩に溢れている春日部から、離れられないでいた。

一方、広い家で育った和江は、明らかに公団住宅の狭さが不満で、東神奈川の父親に頭金を出してもらって、一戸建を買おうとしきりに日下にせがんでいた。だが経済的なことで実家に

頭を下げるのが嫌で、日下は受け入れなかった。

だからなのか和江は頻繁に里帰りをする。

その和江との結婚は六年前で、日下は三十五歳で和江が二十六歳の、ちょうど十歳の違いがあった。

和江は日下が大学時代に親しくしていた河辺^{かわべ}聡^{さとし}の妹で、都内の四年制女子大学を卒業して、父親が経営するスーパールの、事務を手伝っていた。河辺の紹介で知りあってから、二人は一年ほど付きあって結婚した。

「あいつは甘やかされて育ったから、結婚してから苦労するかもしれないぞ」

いざ結婚を決意した段階で、日下が和江への気持ちを打ち明けたとき、河辺が生真面目^{きまじめ}な顔で忠告した。河辺は父親のスーパー経営を継ぐことが決まっていて、帝王学の勉強で忙しい合間をぬって、春日部まで遊びにきて、向かいあって飲んだときのことだった。

襟足の肌理^{きめ}のこまかい、色白な和江はぼっちゃりしていて、右の頬にえくぼが出る愛くるしい顔立ち。夢中になったというほどではなかったが、三十代の半ばで、結婚のチャンスを逸しかけていた日下は、河辺の忠告を無視した。

結婚してしばらくは、当然のこととして波風一つ立たない甘い生活だった。だが出産で実家に戻った和江は、こずえが生まれてから三カ月以上も居つづけて、たまらなくなった日下が迎えに行つて、ようやく帰ってきたが、このころから和江の、自分本位な我^わが儘^{まま}が目につきはじ

めた。

やれ実家の祝い事だ、姪が高校に入った、兄の聡が海外へ旅行するのと言つては、一カ月以上も家を空けて日下をほったらかしにした。こずえが幼稚園に行くようになってからは、春や夏、冬休みの度に実家で過ごしていた。

かといって和江は、日下と顔を合わせているのが嫌だとか、子どもができて、夫がうとましくなったというのではなく、河辺が言つた、甘やかされて育つた我が儘のせいだった。いずれこずえが大きくなれば、和江も母親として落ち着くだろうと、日下は鷹揚おつように構えていたが、いつになつても、長い里帰りの習慣を変えようとしないう和江に、本音はいい加減うんざりしていた。

団地の駐車場に車を入れ、六階建て公団アパートの、歩いて上がるしかない四階の部屋のドアに、鍵を差し込むと開いていた。

鍵はかかつていなかった。

出かけるとき、ちゃんと鍵をかけたはずだがと不審に思い、日下は一步退さきがつて無意識に身構え、室内に入ると、テレビの音がしてなんと和江とこずえの二人が、並んで居間のテレビを見ていた。

「なんだ。二人とも帰っていたのか」

日下は苦笑しながら言つた。